

平成 27 年度「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（高等学校）」
委託業務報告書【推進地域】

番号	14	都道府県市名	神奈川県
----	----	--------	------

1 推進地域における学力に関する現状

平成 21 年度に、神奈川県教育委員会は、一人ひとりが持っている力を必ずしも十分に発揮できなかった生徒に対して、これまで以上に学習への意欲を高め、基礎学力や社会性を身に付けて有意義な高校生活を送れるよう、また、「わかる授業」の展開や「実体験からの学び」を推進するため、1 クラス 30 人以下での展開や授業時間の工夫を行うといった、新たな仕組みを取り入れた高校をクリエイティブスクールとして 3 校設置した。これらの学校の入学者選抜では、調査書の評定を用いず観点別学習状況の評価を活用し、学力検査を行わないなど、学ぶ意欲を重視した総合的選考を行っている。

3 校は、それぞれ設置理念に基づいて特徴ある教育活動を展開しており、様々な理由から中学校までの学習で成果を挙げられなかった生徒を、自己有用感を持ち、社会人としての必要な能力を備えた人材として育成すべく取組を進めている。しかし、平成 25 年度に実施した神奈川県立高等学校等学習状況調査において、県全体とクリエイティブスクール 3 校の調査結果を比較したところ、クリエイティブスクールでは、学力の定着に課題が見られ、学習へ取り組む姿勢が消極的である生徒が多く入学しているといえる。

推進校である大楠高等学校の生徒の学力は「神奈川県立高等学校等学習状況調査（国語、数学、英語）」によると、県平均と比較して全般的に通過率が低いという特徴が見られる。さらに、県平均と比較して無解答率が高いこと、とくに、選択肢より選んで解答する問題でも無解答率が高いという特徴がある。また、中学校までの基礎的な学力については、学校からの報告によると小学校で学習することになっている基礎的な知識や技能についても習得が不十分な生徒がいることが確認されている。

以上により、大楠高等学校の生徒の学力は、県内の平均的な高校生と比較して全体的に低いことが分かる。

2 平成 27 年度の重点課題

学習意欲の向上や学習習慣の定着を図るための学習活動や指導方法の工夫・改善

3 研究の内容

(1) 学力向上推進協議会の設置

推進校である神奈川県立大楠高等学校が「協働的な学び」の実践による学習活動や指導方法の工夫・改善をとおして、学習意欲の向上や学習習慣の定着を図ることを目的とした調査研究を円滑に実施するため、学校教育関係者、大学関係者、教育研究機関関係者等を委員とする学力向上推進協議会を設置し、必要な指導・助言及び本調査研究の成果等の検証を行う。

・第 1 回 平成 27 年 9 月 9 日

・第 2 回 平成 27 年 12 月 14 日

(2) 推進校において開催する研修会・研究会の支援

推進校である神奈川県立大楠高等学校において開催する研修会の実施に当たり必要な助言を行うなど支援する。

- ・第1回 授業研究会 平成27年6月18日
- ・第2回 授業研究会 平成27年9月15日
- ・第3回 授業研究会 平成28年1月22日
- ・協同的な学び学習会 平成27年8月28日
- ・県立高等学校教育力向上推進事業 Ver. IIにおける公開研究授業 平成27年11月24日

(3) 生徒による授業評価の分析、課題の抽出

平成27年12月にすべての県立高校において実施した「生徒による授業評価」（平成28年1月提出）を集計、分析し、課題の抽出を行っている。今後、全校のデータの分析結果及び把握した課題に基づき、推進校における「生徒による授業評価」の分析結果に対し指導・助言を行う。

4 研究成果等の把握と検証

(1) 学力向上推進協議会における研究成果等の把握と検証

学校教育関係者、大学関係者、教育研究機関関係者等を委員とする学力向上推進協議会を2回開催し、推進校である大楠高等学校の研究の進捗状況、成果や課題を把握し、研究推進に向けた指導・助言を行った。

平成27年度も前年に引き続き、「学習意欲の向上や学習習慣の定着を図るための学習活動や指導方法の工夫・改善」を重点課題とし、さらに「生徒同士の学び合いによる学習活動や指導方法の工夫・改善」に取り組んでいる。現在の取組を推進することで生徒の学習意欲を向上させ、学習習慣の定着につなげるとともに、研究のまとめにあたり「質的に子どもたちがどのように変容したか」を見取る方法を工夫し、研究成果を他校に説得力のあるものとして発信するよう推進校に対して指導・助言を行った。

(2) 神奈川県立高等学校等学習状況調査による把握

隔年実施（平成27年6月実施）している神奈川県立高等学校等学習状況調査により、学力の状況や学習意欲・学習習慣の状況を把握することで、研究成果を確認し、検証する。

(3) 生徒による授業評価による把握

すべての県立高校が12月に実施した「生徒による授業評価」を集計、分析することで、生徒から見た授業の充実度や生徒自身の学習へ取り組む姿勢などを把握し、研究成果を確認し、検証する。

5 推進地域における研究成果等の活用

推進校のこれまでの取組を研究紀要にまとめ、関係機関へ配付するなど研究成果を外部へ発信する。また、次年度以降も研究を継続し、校内授業研究を学校の文化として定着させる予定である。

また、神奈川県教育委員会は、平成28年1月に「県立高校改革実施計画（全体）」並びに「県立高校改革実施計画（I期）」を策定し、クリエイティブスクールを新たに2校設置することとした。推進校である大楠高等学校のこれまでの取組を活用し、神奈川のクリエイティブスクールにおける教育活動の充実につなげたい。

6 その他

特になし

(様式7)

平成27年度「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（高等学校）」
委託業務報告書【推進校（学校）】

番号	14	都道府県市名	神奈川県
----	----	--------	------

1 学校の概要

<生徒数・学級数(平成27年4月現在)>

学校名	神奈川県立大楠高等学校（かながわけんりつおおぐすこうとうがっこう）				
学 年	1年	2年	3年	計	教員数
学級数	6（8）	6（8）	6（8）	18（24）	62
生徒数	240	220	172	632	
学校のホームページアドレス		http://www.ogusu-h.pen-kanagawa.ed.jp/			

2 推進校における学力に関する現状

本校の生徒の学力に関して、「神奈川県立高等学校等学習状況調査」（国語、数学、英語）をとおして分かることは、県平均と比較して全般的に通過率が低いという特徴があるという点である。さらに、県平均と比較して無解答率が断然高いこと、特に、選択肢より選んで解答する問題でも無解答率が高いという特徴もある。また、中学校までの基礎的な学力については、本校がクリエイティブスクールで、入学時に学力検査を行わない学校であり、入学時の学力を把握する別の調査も実施していないこともあり、把握し難い部分があるが、本校教職員の観察では、生徒の中には次のような小学校で学習することになっている基礎的な知識や技能についても習得が不十分な生徒がいることが確認されている。

- ・小学校低学年配当の漢字を読めなかったり、掛け算の九九ができない。
- ・アナログ時計を読み取ることができない。

これらのことから、本校の生徒の学力は、県内の平均的な高校生と比較して全体的に低だけでなく、在籍生徒個々の学力にも大きな差があるという特徴があることが分かる。

ここで、教職員や生徒に聞き取りを行い集めた、本校の生徒の特徴についてのエピソードを紹介する。

【エピソード1】

入学式後、毎日生徒と今日一番楽しかった授業とその理由というテーマを決めて交換日記をしていたのですが、交換日記の中に「委員になったのでお赤飯を炊いた。」とか「お祝いをした。」

ということを書いている生徒が、複数いたんですよ。保護者面談でそのことを話したら、「今まで、そういうことをやりたくてもやれなかったのが、すごく嬉しかった。」という感想を保護者もおっしゃるということがありました。

【エピソード2】

接触やチームを嫌うということもあり、集団スポーツが苦手です。一番安心するのは一対一のスポーツです。あと、負けても傷つかないように勝負事に熱くならないという特徴があります。今年の4月に、「体育」の最初の授業で「手つなぎ鬼」やペアでストレッチをしたのですが、「手つなぎ鬼」はうまくいきませんでした。

これらのエピソードの内容なども含めた上で、本校生徒の特徴をまとめてみると、次のように整理することができる。

- ・小学校、中学校での成功体験が少ない。特に中学校時代をうまく過ごせていない。
- ・自尊感情が傷ついたり、自己肯定感が低い。
- ・他人との距離を調整する能力が低く、対人関係が限定される。
- ・発達面に課題があり、未熟な言動が多い。
- ・抽象的な言語の理解が苦手で、経験が一般化しにくい。
- ・極端な視覚優位であったり、集中できる時間が短い。
- ・家庭の状況から、家族の支援に多くを期待できない。

こういった特徴を持つ生徒たちが、学校、教室の中で、どう過ごしているのかというと、委員会や部活にも入らず、授業中も授業に集中できず、私語が止まらなかったり、注意すると暴言を吐いたりする生徒もいれば、学校生活や授業を意欲的に過ごそうとしている生徒もいる。このように、同じような特徴や経験を持つが、高校生活や学習への意欲には大きな差がある生徒たちが、同じ時間に同じ教室の中に混在している状況である。

3 研究課題

今回、文部科学省から「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業（平成26年度までは「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」）における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（高等学校）」の研究指定を受けて、学校の現状やこれまでの課題等を踏まえ、改めて「協働的な学び」をキーワードに「学習意欲の向上や学習習慣の定着を図るための学習活動や指導方法の工夫・改善」の研究、より具体的には「生徒同士の学び合いによる学習形態の導入という観点からの授業づくりと検証」に取り組むこととした。

4 平成27年度の重点課題

本校では、平成27年度は、「協働的な学び」の実践による指導や取組の工夫・改善をとおして、学習意欲の向上や学習習慣の定着を図る実践研究を進めることとした。「協働的な学び」における生徒が学び合う関係づくりの基礎は、他者の声を聴くことであり、対話的コミュニケーションの実践が学習の基本になる。そこで、この基本を踏まえ、生徒が相互に学び合う授業展開の導入を図り、生徒が協力し課題を解決する学習活動を展開することで、積極的な学習活動への参加、取組を促すこととした。具体的には、すべての教科・科目において、指導に当たって、「自ら考える場面を作ること」、「書く、話すなど発表する場面を作ること」、「他者の話をしっかり聴く場面を作ること」を実践することとした。

5 研究の具体的内容

当初の計画では、平成27年度は研究2年目に当たることから、4月当初から実践研究を進める予定であったが、教職員の異動が非常に多く、研究推進体制を整えるとともに、新たに転入した教職員に対し「協同的な学び」に対する理解を図るところから始めざるを得なかった。このことを踏まえ、平成27年度は、3回の授業研究会、1回の「協同的な学び」学習会を行ったが、夏の「協同的な学び」学習会の頃からようやく教職員の積極的な取組が見られるようになった。結果的に、これらの授業研究会、「協同的な学び」学習会、学力向上推進協議会、文部科学省視学官視察などをとおして、「協同的な学び」に対する理解が徐々に深まり、授業実践も深まりを見せていった。

9月からは、同一学年の授業を持つ2～3人の教職員を一つの小グループとし、一人がジャンプの課題を意識した授業を実践し、他の教職員がその授業を参観して「個別、特定の生徒の活動や反応の事実等で気付いたこと、そこから感じたこと、考えたこと」を良い悪いのラベルを貼らないで記録し、授業後にその記録を基に、「ジャンプの課題の効果の検証」、「その他生徒の反応等を踏まえて気付いたこと」を協議する取組を行った。

その他、協同学習に取り組んでいる滋賀県立草津高等学校及び埼玉県立新座高等学校へ教職員を派遣し、それぞれの取組を視察し、報告会で共有化した。

このように、勉強会で学習したり、個々の教職員が進めた優れた授業実践を「授業研究ニュース」（1月までに29号まで発行）という形で大楠高等学校の全教職員に紹介する中で、少しずつ理解や取組が進んできた。

具体的には、「生徒がどのように学んでいて、どこでつまづいているか」ということを中心に授業観察・研究協議ができるようになり、こういった授業観察・研究協議を基に、各教職員がそれぞれの気づきを基に工夫を積み重ねていくことができるようになった。

研究成果は、「神奈川県立高等学校等学習状況調査」、「生徒による授業評価」、生徒の成果物や生徒の観察による把握、第三者による学習状況の評価により把握することとしたが、結果的に、生徒の授業におけるワークシートやレポートなどの成果物や生徒本人に対するインタビュー調査、アンケート等を活用して把握した。

6 研究の成果

「生徒による授業評価」における「⑨授業中、生徒が考えたり、調べたりする場面が用意されている。」、「⑩授業中、生徒同士で話し合う機会や意見などを発表する機会がある。」の質問項目で、「とてもそう思う」と回答する生徒の割合が4割近い数値（全教科平均39.3%）になった。

一方、それを生徒がどう捉え、生徒の個々の学びにどうつながっているのかということとはなかなか証明しにくかったが、多数の教職員のインタビューから、本校の多くの教職員が「生徒が取り組むようになった」、「学びから脱落しなくなった」ということを実感として持つようになってきているということが分かった。また、生徒からも「学ぶのが楽しい」という声がアンケートなどから挙がっている。

【生徒のアンケートの記載例】

- ・グループ学習をするのが楽しかったです。いろいろな事が分かり興味を持ちました。
- ・班でやるプリントは、皆でやるから進むのが早いので楽しい。皆が集中して取り組めていて、すごくいいと思います。
- ・プリントが終わった後の答え合わせで、発言がするのが楽しい。

また、「神奈川県立高等学校等学習状況調査」における「学習全般に関するアンケート調査」では、「授業で分からないことがあったとき、どうすることが多いですか。」という質問に対して、学校の先生にたずねる」（25.1%→56.5%）「友人にたずねる」（34.6%→64.3%）という回答のポイントが昨年度に比べて格段に上昇していることが確認できた。授業中における行動もこの中に含んで生徒が回答していると思われるので、グループ学習の際に生徒同士が互いに聞き合って学習していたり、グループ学習の際に支援が必要な生徒に教職員がピンポイントで支援していたりすることがこの数字に表れていると考えられる。また、このことは、教職員による生徒の観察でも確認されている。

【グループ学習中の生徒の様子や教職員の関わりの例1】

4人グループで、英語の文章を聞かせてから、プリントのブランクを埋めさせるということをしています。生徒たちは、聞き取った段階では綴りが分からずカタカナで書いていても、グループで綴りを聞き合ったり、確認し合ったりしています。

【グループ学習中の生徒の様子や教職員の関わりの例2】

「今日はイライラするから…」なんて言って学びから脱落しそうになる生徒には、その生徒に対しての、その時間の目標を示して「ここまでやろうよ。」と言葉がけをしています。また、周囲の生徒も同じように言葉がけをしてくれます。

これらのことから、「協同的な学び」の考え方をベースに、生徒同士の学び合いによる学習形態を導入した授業実践を行うと、「生徒の取組状況が変わる」（学びへの取組の変容）ということが程度確認できた。

7 今後の課題

研究の成果に関しては、教職員それぞれの実感には差があり、今後の校内授業研究の継続性という点で課題が残った。また、グループ学習を嫌がる生徒もおり、その理由を追究したり彼らを支援したりしていくことに課題が残った。

8 その他

本校は、「県立高校改革実施計画」により、平成32年に横須賀明光高等学校と再編・統合され、普通科（クリエイティブスクールとして設置）と福祉科の併置校となる。今後は、これまでの校内授業研究の流れを大きな流れとし、新校に移行するまでの3年間を十分に生かし、すべての生徒が学びに向かう流れを作り、新たなクリエイティブスクールづくりにつなげていきたいと考えている。